

『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判について

笠井哲

一 はじめに

沢庵（一五七三—一六四六）の『不動智』における思想は、柳生新陰流兵法に多大な影響を与えているだけでなく、他の剣術流派や柔術諸流派にまで、その影響が色濃く反映されている。『不動智』は、まさに江戸時代における武芸思想のバイブルといえることができる。

しかし、この『不動智』に対する批判書も存在している。それは『儀理之評判』というもので、柳生新陰流の関連文書を集成した『史料柳生新陰流』に収録されている。これは、天和三年（一六八三）に、紀州根来の武芸者・稲垣貴直が、沢庵の『不動智』を批判した言葉を、弟子の湯川久右衛門が記録したものである。

久右衛門は、『儀理之評判』の前書きで、「沢庵が兵法をご存じないので悪しき所があり、これを見捨てておくことができず、居もしない沢庵を相手にして、貴直が独り言を申され

たのを自分が書き留めた」と述べている。

この『儀理之評判』は、『不動智』を批判した唯一の文献でありながら、これまでほとんど取り上げられることがなかった。本稿の目的は、『儀理之評判』において展開された沢庵『不動智』への批判について、考察することである。

二 無心に対する誤解

『儀理之評判』の第一条で、まず貴直は、仏法にいう「放心」の境地について、仏法では心が放たれても格別の問題はないであろうという。しかし、兵法では動く敵がいるので、そうはいかないものであると批判している⁽⁴⁾。

兵法では予測をし、待たず懸からず、進むにも引くにも心を居つかせず、その緩急の拍子の間に、敵の虚実を見て打つのである。敵も上手に動くのであるから、打つのも打たれるのも皆、無我夢中のことである。にもかかわらず、沢庵がいう「無念無想」の境地は、木の仏が木の仏にしがみつこう

『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判について（笠井）

なものである。人に命がある間は、木仏のようにはなれない、と主張するのである。

貴直は、沢庵の説いた「放心」について、「言葉多くして品すくなし」と酷評している。貴直は、心を自由にする「放心」が、実は長年の「有心」の技の鍛錬を経て、ようやく到達しうる「無心」の境地であるということを理解していない。これでは、あたかも揚げ足取りのような批判であるといえる。

この「放心」について、沢庵は『不動智』で、次のように説明している。⁽⁵⁾「放心を求む」というのは、孟子が述べたことである。離れた心を捜し求め、我が身へ取り戻せ、という意味である。例えば、犬や猫や鶏でも離れてよそへ行ったら、捜して我が家へ帰すのに、心はその人自身の主人であるものを、悪しき道へ行つて心が留まっているのを、どうして求め尋ね、我が身へ取り戻さないものであろうか、といったのである。

さらに、邵康節（一〇一―一〇七七）という人が、「心は放つことを要す」といった。この心得は、心をとらえて置いては、つながれた猫のようで、身が動けないぞ、物に心を取られず、物に心が染まらぬように、よく心を用い、心を捨てたままにして、どこへでも放せ、という意味である。

初心者が、稽古の所作に気をとられ、敵に心を奪われるので、喩えとしていったことである。最高の境地に至るのであ

れば、心を捨てなければ役に立たない。蓮の花は、泥に染まらない物なので、泥の中にあつても清らかである。心を磨いた水晶の玉が、泥に入っても染まらないようにし、行きたいところへ行かせるのがよい。心を引き締めておくのは、初心者のことである。初心の稽古の時は、孟子のような心境である。名人の最高に至った時の心は、邵康節のような心境である。孟子の「放心を求む」とは、修行の段階であり、邵康節の「放心」とは最高の到達点ということである。

次に、第二条では、沢庵が「千手観音が一つの手に心を留めたら、九百九十九の手は働かないだろう」と述べたことについて、貴直は、「仏法にも背くし、兵法にも背く」と批判している。貴直は、「我々のような凡夫でも、敵を左の手にしっかりと捉え、左の手にも心を留めても、右の手は働く。ましてや、仏・菩薩の九百九十九の手は働くまいとは思ひもよらない。千手観音の慈悲は、一つの手にも心を居つかせず、千の手を平等に動かし、慈悲があるはずである」と述べている。

沢庵によれば、千手観音像は、心が必要に応じ様々に手を働かせることを象徴した姿である。したがって、この批判も言いがかりのようなものである。沢庵は、不動智を備えたシンボルとして千手観音をあげている。沢庵の真意は、次のようである。千手観音というのは、手が千本おありになるが、もし、弓を持っている手に心がとらわれてしまえば、残りの

九百九十九本の手は、どれも役に立たなくなるに違いない。千手観音は、一つの所に心をとどめないからこそ、千本の手が皆、役に立つのであるという。

さらに、沢庵は『不動智』の終わりの方で、政治家としての柳生宗矩（一五七一―一六四六）を戒めた文章においても、「千手観音」を例に挙げている。すなわち、このような金鉄のよきに忠実な兵を、あらゆる場合に役立てるならば、たとえ千万人の兵も、意のままになるであろう。それは、先に述べた千手観音と同じであるという。

千手観音の心が正しければ、千の手をすべて自在に使いこなせるように、あなた（宗矩）の兵法が正しければ、あなたの剣の働きも自在となり、数千人の敵も一刀の下に切り捨てることができるようなものである。これこそ、大きな「忠」ではないかという。こうした政治的な側面は、一介の武芸者に過ぎない稲垣貴直には、理解不可能であったのであろう。

三 柳生新陰流への誤解

第三条では、『不動智』冒頭で沢庵が取り上げた禅語「却而把鎗頭倒刺人來」について、貴直は、次のように批判している。「太刀を持たずに、敵の太刀を自分の太刀にして、逆に敵を打つ」と虚空をつかむかのように沢庵はいわれた。しかし、兵法では敵というものがあるので、そのように打った

なら、逆に敵に余されて、敵に討たれてしまう。兵法の優れた境地は、命を捨て、氣を生じ、千人は一人、一人は千人、と思い、一生の思い出が今日限りと、潔く働くのである。その時には、打つも打たれるも夢の内の夢である」と。

貴直が、柳生新陰流の極意（秘伝）である「無刀」を知らないことは、明らかである。沢庵は、『不動智』では、次のように説明している。打ち込んできた刀を見ることは見るのであるが、敵の太刀に心をとらわれることなく、相手の太刀に拍子を合わせて、打とうとは思わず、思慮分別をせず、振り上げてきた太刀を見るや、心を一瞬もとどめず、そのまま飛び込んで、敵の太刀に取りつくなら、自分を切ろうとする敵の太刀をこちらにもぎ取り、かえって相手を切ることができるという。

さらに続けて、禅宗ではこれを「還って鎗頭を把み倒まに人を刺し来る」という。鎗は、「ほこ」のことである。人の持っている刀を我が方にもぎとって、逆に相手を切るということである。あなた（柳生宗矩）のいつている「無刀」ということがそれであるという。

「無刀」とは、自分が刀を持っていない状態のことであり、無刀の時でも負けない柳生新陰流の極意である。ただし、相手の刀を奪い、奪った刀で相手を切る、ということを目的とする技ではない。切られなければ、勝ちだというのである。

『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判について（笠井）

第四条では、沢庵のいう「心の置所」に関して、「思案分別に涉らずといわれたが、無分別を兵法とは思ひも寄らない。兵法は知恵、才覚、思案、分別、駆け引きの剣術の手段方法である」と批判している。沢庵のいう「無分別」とは、「無心」の技のことであるから、貴直はそれを否定していることになる。繰り返しになるが、貴直は、「無心」の技が、実は「有心」の技の究極にある、とは考えていない。

『不動智』の説明箇所を、見ておこう。ある人は、またこういった。「心を臍の下に押し込んで働かなくては、不自由で役に立たないというのであれば、心を身体のどこにおいたらよしいか」。私（沢庵）は答えた。「もし右手に置けば、右手に心をとられて、動きが自由にならない。眼に置けば眼に、右足に置けば右足に心がとられて自由がきかない。どこか一カ所に心を置けば、結局余所はすべて、留守になってしまう」と。

さらに続けて、「では、どこに置けばよいのか」。「どこにも置かないことである。そうすれば、心は身体いっぱいに行きわたり、全体にのびのび広がる。手を使うときには手の、足の要るときには足の、眼の要るときは眼の役に立ち、身体中どこでも必要に応じ、自由な働きをすることができる。もし、心の置き場を一つの所に定めて置くなら、そこに心をとられ、役には立たなくなる。心の置き場を思案すれば、その

思案に心をとられるから、思案や分別をきれいに捨てて、全身に心を投げ捨てて、どこにも心をとどめず、身体の各所の必要に応じて、役に立てばよい」という。

ここでは、「心をどこにも置いてはいけない」ということをいつている。心が一つの所に置かれなくなると、心は身体いっぱいに行きわたり、のびのびと広がるからである。沢庵のいう「心が全体に延び広がる」とは、どういうことをいうのであろうか。西田幾多郎の言葉を借り、哲学的に表現すれば、「全体作用的⁽⁶⁾」ということになるといえよう。

四 仏道修行への誤解

第六条では、沢庵が取り上げた無学祖元（一二二六～一二八六）の「電光影裏、春風を斬る」に関連して、次のように批判している。「人も世にある時間は、電光の瞬間である。ピカリと、打つ太刀と、電光の瞬間である。その瞬間には何の心もなく、思念もなく、打つ人も無心、打つ太刀も無心、打つ人も空を打ち、打つ太刀も空を切り、我も空を打ち、打つ人も人ではなく、我も我でもなく、春風を切るようである」と沢庵はいわれたが、それは「無念無想」であり、仏道修行のことにすぎない。兵法では、敵と見るから、打たねばならないと思う念があり、心がある。最初に少し間違うと、千里の隔たりになるという。

貴直は、仏道修行を「無念無想」とし、武道修行を「有念有想」として区別している。

彼は、第十一条では「拍子に心をとどめるな」という沢庵の教えについて、次のように批判している。「向こうから打つても、左右から打つても、打つ人にも打つ太刀にも、緩急の拍子にも、少しでも心を留めたら、手前の働きが抜ける」と沢庵はいわれた。それは、沢庵が兵法をご存じないからである。兵法では、拍子の緩急を第一に用いるのである。拍子に合わせなかったら、どうして上手といえるであろうか。兵法では、敵がまだ打つか打たないか、その拍子をよく覚え、その拍子を外さずに打つことが先前先機であるという。

確かに、稽古中は拍子を意識せねばならない。相手の打突のタイミングを外させ、自分はタイミングを外さないことは重要である。しかし、沢庵は、その稽古が無用だと説いているのではない。貴直の批判は、ここでも的を射ていないのである。

沢庵の所説を聴いてみよう。向こうから打つてこようが、こちらから打つていこうが、打つ人にも打つ太刀にも、間にも拍子にも、一瞬でも心がとらわれてしまうと、こちらの働きが留守になって、相手に切られてしまうことがあるという。敵の前に我が身を意識すれば、かえって敵にも心をとられるので、我が身にも心を引き止めてはならない。我が身を引

き締めておこうとするのは、初心者の頃、習い始めたばかりのことである。我が身を引き締めようとする太刀に、心がとられるのである。

打ち込む瞬間の拍子具合に、心をとられれば、我が太刀に心がとられてしまうのである。このように、心がとまっては、自分自身は抜け殻のようになってしまうのである。

あなた（柳生宗矩）にも、そんな経験はおありのことと思う。それを仏法にあてはめて申したのである。仏法では、そのとられる心を、「迷い」というのである。そこで「無明住地煩惱」というのである。

第十二条で、「沢庵がいわれたことは、一部始終は仏法による『無念無想』の心だけである。わたし（貴直）の兵法では、敵がいるので『有念有想』の心である」と述べている。貴直の立場は、朱子学にも共通の「敬」を重視するような立場に他ならない。これに対し沢庵の立場は、「敬」の上に「無心」を置くような立場である。しかし、沢庵は、「敬」を否定しているわけではない。

沢庵の説く「無念無想」は、「有念有想」を否定したものではなく、「有念有想」の修行を通じて獲得される、よりいっそう高い「無心」の境地に他ならない。「敬」と「無心」は、一連一体の修行の段階を示す概念である。これらに対立する概念として、二分して考えるのは誤りであるから、貴直の『不

『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判について（笠井）

動智』批判は妥当性がないといえる。

五 おわりに

以上、見てきたように稲垣貴直の『不動智』批判は、的を射ていない箇所が数多く見受けられた。しかし、彼が沢庵に同意している箇所も、次のように少なからずある。

例えば、第五条では、「年月稽古すれば、何の構えにも心がとどまらず、心がどこかへ行つて、手足がよく覚えて働く」と沢庵はいわれたが、心がどこかへ行つてしまったら、へんなものではなかるうか、と貴直は疑問を呈している。しかし、事と理の二つを稽古せよという沢庵の教えについては、「稽古での刀の使い方は、事理の二つを車の両輪のように稽古すれば、必ず体がよく覚えて、敵と闘う時には、兵法とも何とも思わねば、剣術は自由である」と同意している。

第七条でも、「石火の機」について、「敵が無拍子に打つ太刀の柄へ押し込み、敵が速く打つたら、胸から押さえて打つことを『石火の機』といわれた。これは敵がいると見ていわれたので、その通りである。その心は兵法でいう『先前先之機』と同じである」と貴直は賛同している。

第八条でも、「心を一所にとどめれば、そこに心を取られる」と沢庵はいわれたが、もつともなことである。兵法では、そのことを、待たず懸からずという。同じ意味である」と貴

直は同意している。

また、第九条でも、「知恵才覚も心も事も、何もかも忘れるほどに習い覚えなければ、上手にはなるまいと沢庵はいわれたが、もつともなことである」と貴直は賛同している。

第十条でも、貴直は、沢庵の「不動明王」の解説に同意している。それは、次のようなものである。不動明王は、右手に剣を握り、左手に縄を持ち、齒をむき出し、眼を怒らして、仏法を妨げようとする悪魔を取り押さえようとして突つ立ておられる。そのような姿はこの国にも見られるものであるが、その姿を、仏法を守護する形に作っているが、実は不動智を体現したものである、姿を人々に見せているという。

しかし、第十三条で、「無念無想の色も香りもない、血気情識から離れることばかりを論じたならば、仏はあつても法がない。兵はあつても法がないので、沢庵の教えの究極は、逆に血気強力な無分別な者になるであらう。……忠孝情の道を知って、主君に命を軽々と奉る仁義の勇者を兵法という」と述べている。

ここからも確認できるように、貴直は、やはり無念無想（無心）は仏道であり、決して兵法の道ではないと主張している。『儀理之評判』に見える貴直の『不動智』批判は、有念有想（有心）を重視する見地から、無念無想（無心）を否定しているので、先述のように妥当ではないといえよう。

さて、沢庵によれば、「有念有想」は「有心の心」ともいい、「無念無想」は「無心の心」となり、次のように位置づけられている。「有心の心」、「無心の心」ということがある。有心の心とは、「妄心」と同じである。「有心」とは文字通り、有る心と読むが、何事につけ一つのことを思いつめることをいうのである。何か心に思うことがあって、あれこれと思案するので、「有心の心」というのである。

「無心の心」とは、「本心」と同じ事で、凝り固まることなく、分別も思案も何もないときの心、身体全体に延び広がり、行き渡った心のことをいう。これは、どこにも置かない心である。石や木のように、生きていないのではない。一カ所にとどまることのない心を「無心」という。何かにとどまれば、心に物があり、とどまることがなければ心に何も無い。この何もないのを「無心の心」といい、また「無心無念」ともいうのである。

以上により、『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判は、稲垣貴直の修行不足に基づいた理解不足から生じたものである。妥当性はない。しかし、修行の道の途中にある者が抱く疑問や誤解として、一つのサンプルになるので、柳生家の菩提寺である芳徳寺に遺されていたと考えられる。

1 拙論「『剣禅一如』思想の源流—沢庵と柳生新陰流—」、『印

『儀理之評判』における沢庵『不動智』への批判について（笠井）

仏研』第五十五巻第一号、二〇〇六年。

2 拙論「沢庵禅と武芸」、『印仏研』第四十五巻第二号、一九九七年。

3 拙論「沢庵禅師の柔術思想への影響について」、『印仏研』第五十七巻第一号、二〇〇八年。

4 『儀理之評判』からの引用は、下記によるが一々の頁数は略す。今村嘉雄「改定 史料 柳生新陰流下巻」新人物往来社、一九九五年。

5 『不動智』からの引用は、下記によるが一々の頁数は略す。

澤庵和尚全集刊行会『澤庵和尚全集』第五巻、一九三〇年。

6 西田幾多郎「場の論理と宗教的世界観」、『哲学論文集』所収、岩波書店、一九四六年、一三六頁。

〈キーワード〉 沢庵、『不動智』、『儀理の評判』、無心、有心

（福島工業高等専門学校教授）